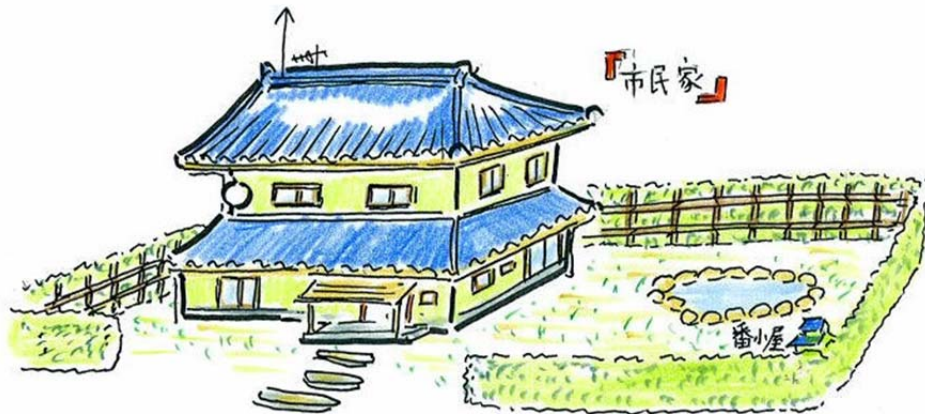


◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

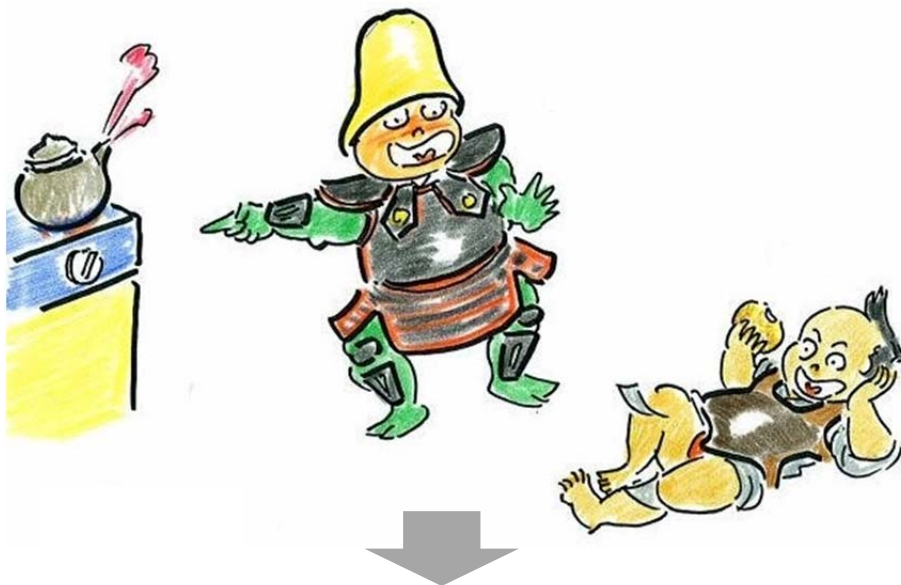
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。





そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！



援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

主な登場人物



支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.20

今朝もしとすと雨が降っております。

金沢の町は梅雨の真ただ中、北陸の梅雨は長くて湿気も多く、不快指数は
相当なものと言われております。



そんな梅雨の時期は洗濯も大変ですなあ。

え？生乾きの嫌な臭いかとお聞きですか？

いえいえ、生乾きの臭いなら梅雨でなくても・・・ほれ

「だ、旦那様、もう少し休んでいきやしょうよ。うん？何です読者の方と何を話されておったのですじゃ？」

「こ奴は年がら年中生乾きでござるよ。」



「えっ？えっ？何です？」と重ねて訊くご助に

「いやな、梅雨時は洗濯物が乾きにくくて困ると言っておったのじゃ。」

「さようですな。旦那様もあたしも替えの衣は一着しか支給されてやせんからね。お勤めのきつさにくらべて被服や手当などの福利が合っただけですよ。」

というご助に

「おいおい、お殿様に知れたら大変だぞ。」

「・・・と旦那様がいつも仰ってます。」

「相変わらずじゃなご助。でもな今日からは大丈夫じゃぞ。」

「な、なんです？」

「ふふふ、これから衣類乾燥機が入るんじゃよ。」

「やっ、やっほーっ、ほ、ほんとですかい？」

「本当じゃとも。奥方様が玄関に・・・ほれ、電気屋が参ったぞ。」

「乾燥機設置に来ました。」と電気屋が

「お願いします。どれくらいで付きますかね？」

「そうすっね。30分もあれば。」と電気屋。

「じゃあお願いしますう。」と奥方様はキッチンへ



「だ、旦那様・・・ようございましたな。これで衣の替えに困りやせんぜ。」

「じゃろ・・・そうならば今から・・・」

「へへへ、水掛けごっこですな。」

「そう、これじゃ。」と拙者は隠し持っていた水鉄砲をご助に向けると引き金を引いたのじゃ。

「あっ、ずるいですぜ旦那さま！」と叫ぶご助に

「ソチには感電の恨みがあるでな (VOL 8 参照)」

「そ、そんな古い話を蒸し返されては困りますう。」と逃げ惑いながらもご助が

取り出したのは芝寿司についておった魚型のタレビン。

ご助が勢いよく魚の腹を踏みつけると放水銃のように醤油が飛び出し



「うわあああああ」と拙者は醤油まみれに。

「ひ、卑怯な・・・どこじゃご助！」醤油が目に入り視界を失った拙者の背後

から

「日頃のうら・・・」と近づくご助を夕日のガンマン。クリント・イーストウッドばりに振り向きざまに水鉄砲で仕留めたのじゃ。



「うわあーっ、や、やられたあ・・・」と転がるご助に

「・・・のうご助。今、日頃のうらとか、まさかとは思いますが恨み・・・とか？」

と聞くと

「嫌ですよ旦那様。た、田子ノ浦・・・に行きたいな、と言いたかったんでさ。」

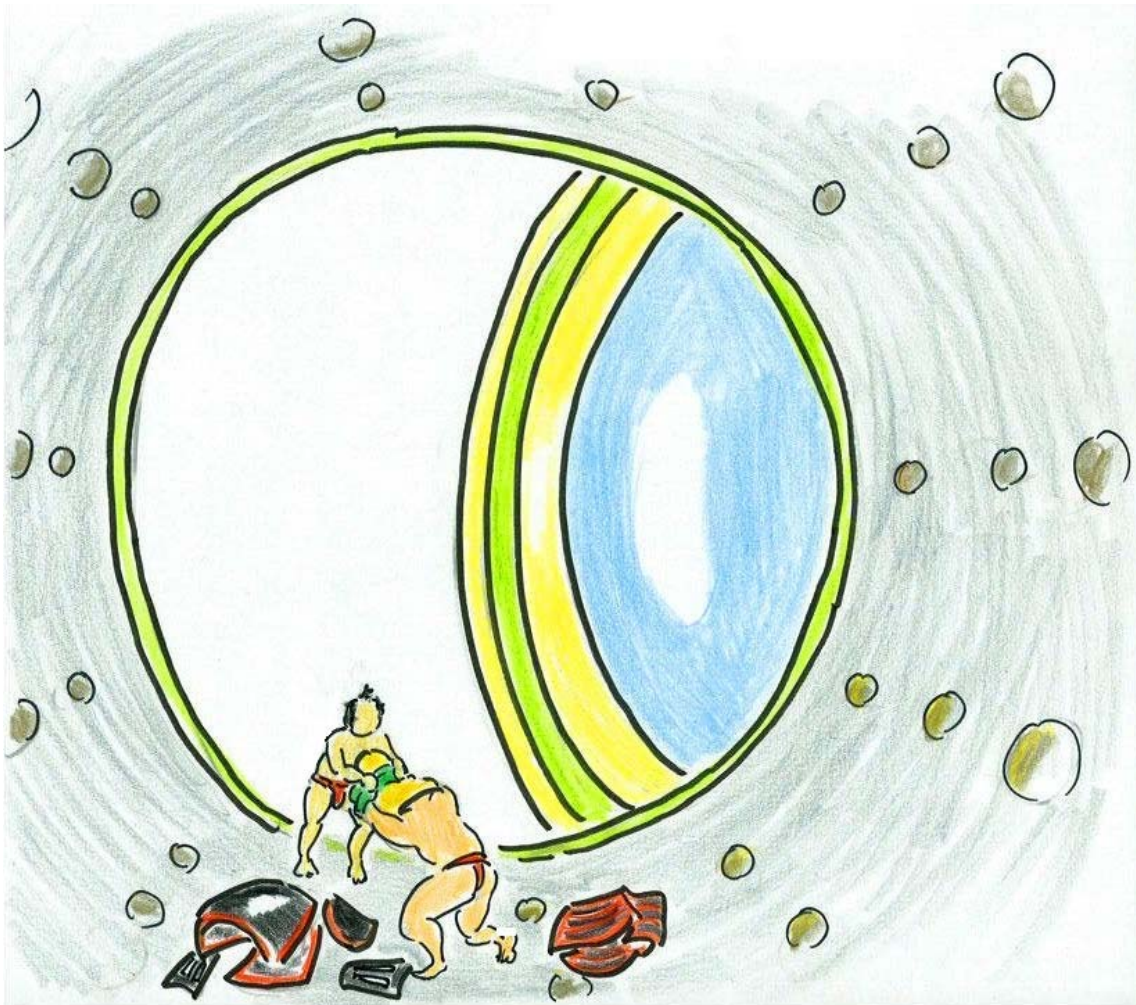
とご助。



「まあよいわ。さて乾燥機もつきたころじゃろ。そうじゃ替えの装束も洗ってしまおう。2着とも洗ってから乾燥機前に集合じゃ。」

「了解。」

「ううむ、脱いで、持って上がるのも大変じゃな。中で脱げば良からう。」と拙者らは乾燥機のドラムの中へ



「ありゃあ旦那様、タバコまでびちゃびちゃですじゃ。」

「そりゃあ損したの。しかし、拙者はこの鎧を脱ぐのに時間がかかるからのお」
と話しておる内に パタンと 乾燥機の蓋が閉められたのじゃ。

「うん？ど、どうしたのじゃ。開けろご助。」

「む、無理でさ、旦那様。中からは開けませんぜっ」とご助の悲痛な叫びが。

確認窓の外、電気屋の店員が

「試運転です。」と

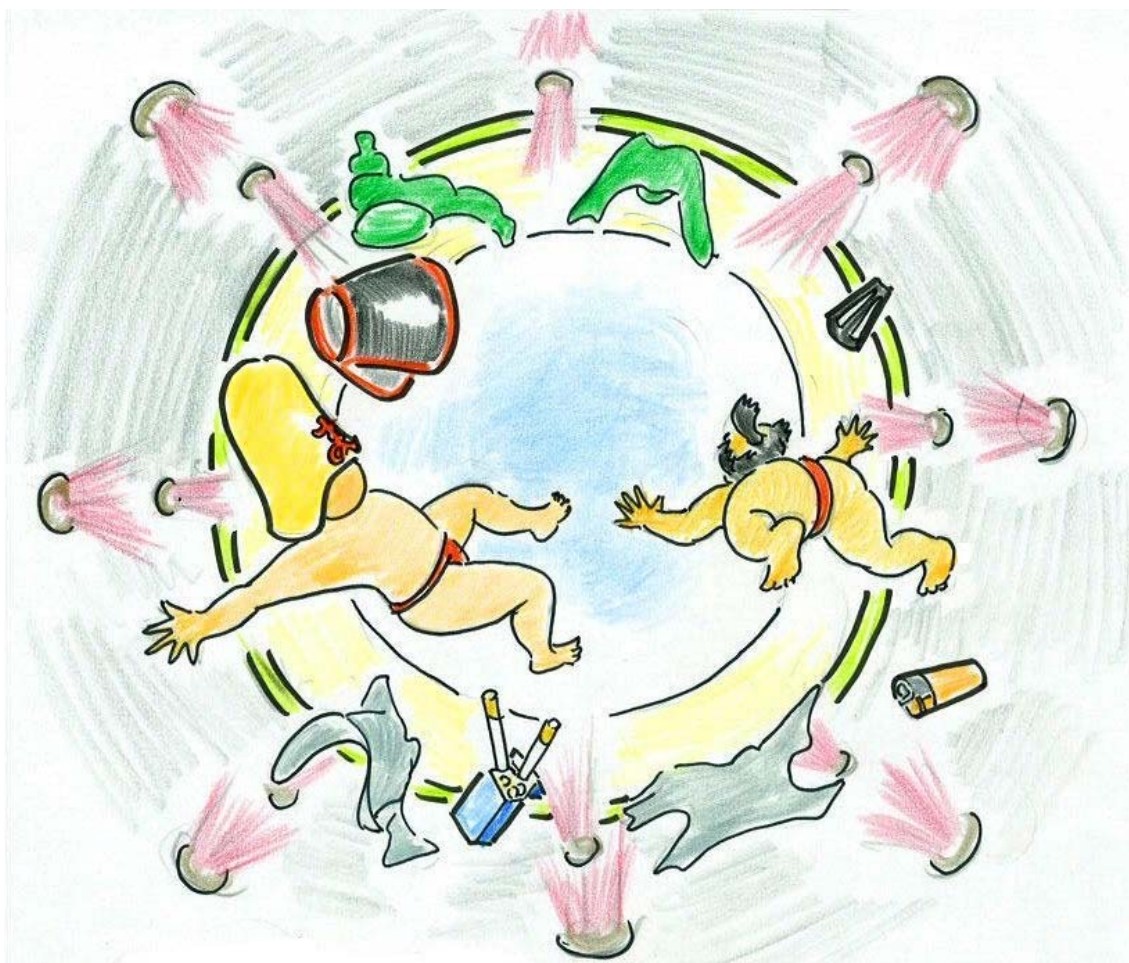
「や、やめろーっ」

「お助けー」

の拙者らの叫びが聞こえる訳もなく、

ごおおおおっと無情にも乾燥機のドラムが回転し始め、熱風が噴き出したの

じゃ。



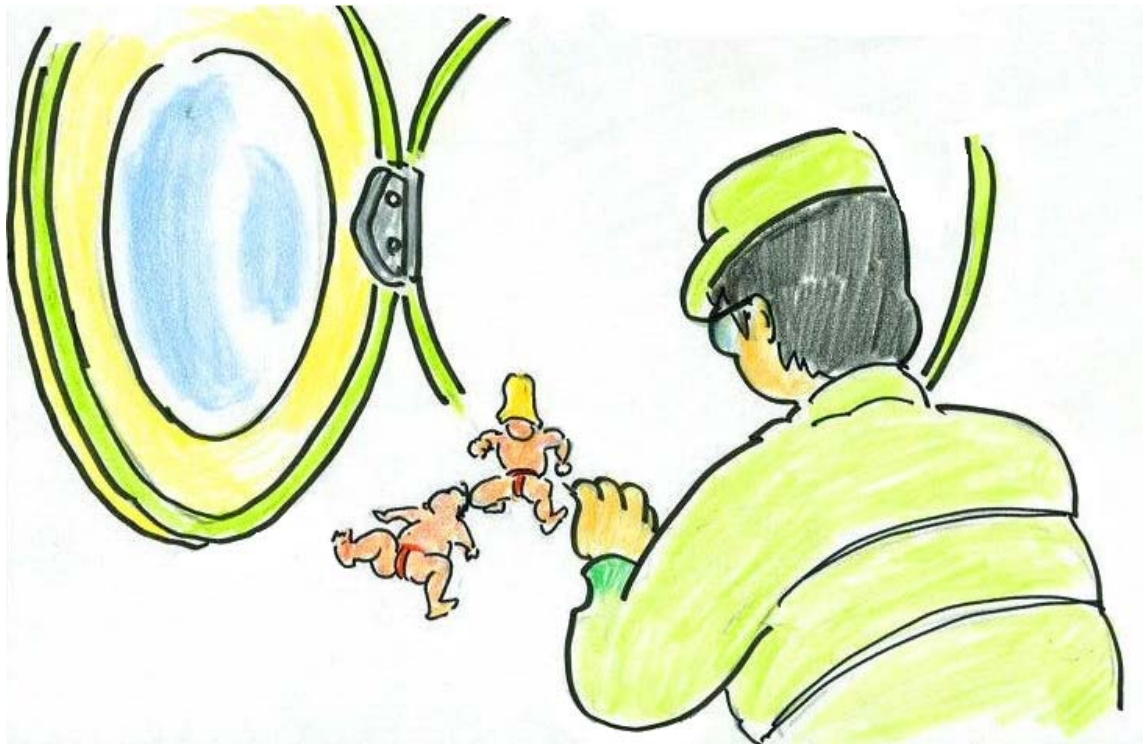
「ひいいい・・・あちちちいっ」

という拙者達の悲鳴は聞こえる筈もなかったが、拙者の鎧がドラムに擦れる
クワランクワランクワラン という微かな音だけは奥方様に伝わったようで

「ねえ、何か異音していない？」と電気屋さんに

「そ、そうっすね・・・」と電気屋さんが蓋を開けてくれたのじゃ。

「ご、ご助今じゃ・・・服を置いて脱出じゃ。」というと拙者のご助はふんどし
一丁の恥ずかしい姿で乾燥機の外へと飛び出したのじゃ。



「だ、旦那様、ひでえ目に遭いやしたね。あの馬鹿にもう少しで一夜干しにされるところでしたぜ。」というご助に

「馬鹿に馬鹿と言われるほどの辱めはないの。」とみればご助が何やら辺りを探し回っておったのじゃ・・・

「そ、そうっすねえ。奥さんもう一度運転してみますね。」と電気屋がスイッチを入れると

「あああっ」とご助が両手を口に当てモゴモゴしだしたのじゃ。

「ど、どうしたのじゃ？ご助？」と不安に駆られた拙者が確認すると

「な、何でもねえですって。もう少しで干物にされかかって震えているんでさ。」

と答えるご助に

「おのれがそんな玉か！何をしたんじゃと聞いておるのじゃ！」と更に問い詰

めておりますと不意に

ドオオオオンツ という音が響き乾燥機が停止したのじゃ。



「ちょっとお、今ポンツて変な音がしたんじゃない？大丈夫なの？」と奥方様が聞くと

「そうっすねえ、なんか音がしましたねえ。」と電気屋さん。

「止まってるじゃない。不良品じゃないの？」と奥方様が続けると

「そうっすねえ、なんか・・・ぽいですねえ。」と電気屋。

「・・・もう良いから持って帰って。」と奥方様。

「そ、そうっすね。交換で良いっすか？」と電気屋。

「交換もいらぬ。もう買わないから持って帰って。」と奥方様

「そ、そんなぁ・・・」と初めて『そうっすね』を言わなかった電気屋を見上げ、

「だ、旦那様。天罰ってやつですね。」とご助が言うのを

「・・・お、おのれのライターじゃな？」と拙者が言うと

「だ、だって旦那様が服を脱げって言うから・・・

落ちたんでしょライターが。」と



「おのれは馬鹿か？乾燥機の中に洗濯物以外を入れるとは、それもよりによっ

てライターじゃとは、情けなくて涙も出んわい。」

「な、涙なら出てますよ。」というご助に

「どこに出てる？」と問いますれば

「ほれ、旦那様電気屋の頬に。」

「馬鹿者め、おのれのせいで電気屋が被害を被ったのじゃぞ。」と拙者が言う

と

「わ、悪いこといたしましたな。」と素直に反省するご助じゃった。

「まだいる？電気屋さん？」

「は、はい。」

「この前娘がおねしょしたのよ。やっぱり乾燥機頂くわ。新しいの持って来て。」

「ありがとうございます。直ぐに手配します。」と電気屋は意気軒高と駆け出していった。



「良かったな。」

「良かったでやす・・・が、へえくしょん・・・何か着ないと風邪ひきますぜ。」

「そうじゃな・・・あっ・・・ご助よ。拙者の装束は・・・乾燥機から出したであろうな？」

「だ、旦那様、着替えは2着ともあの乾燥機の中ですぜ。」

「ば、馬鹿者っ。さっさと出しておかんかっ。」

「ど、どうせあっしは馬鹿ですよ。なんでえ叱ってばかりで。」

「な、なにをっ。元はと言えばおのれがライターをじゃな・・・」

「くどくど言っこ無しですぜ。電気屋のトラックを見失ったらしばらく禪一丁ですぜ。」

「羅生門じゃないっ！追うのだご助。」



「あっ、旦那様、外に置いてってありますぜ。」

「そ、そのようじゃな・・まずは助かったな。どれ、乾いておろうの。」

「ははは、黒焦げのベチャベチャでさ。」



「乾燥機が入ったと喜んでおったのに、な、なんの因果で・・・」と嘆く拙者に

「まあまあ旦那様、一服しやせんか。」と半乾きの煙草をくわえるご助を見て

「・・・お前という奴は・・・とことんタフな・・・」と言いかけて

「あれれ・・・ライターがねえな。旦那様、あっしのライター知りやせんか？」

と言うご助に

「・・・やはり・・・とことん馬鹿な奴じゃったのお・・・」とため息をつ
きましたのじゃ。

(おわり)